

平成元年五月二十八日

郷土研究会資料

第一六七回 史跡めぐり案内

日光御成道を訪ねて

(岩槻市加倉から城跡まで)

越谷市郷土研究会



白鶴城址碑

第一六七回 史跡めぐり

とき 平成元年五月二八日

集合 越谷駅前 午前八時四〇分

行き先 日光御成道 (岩槻市加倉から城跡まで)

コース 越谷駅(電車)―春日部駅―岩槻駅―芳林寺(太田氏資供養塔)―弥勒寺―淨因寺(阿部氏の菩提寺)
―洞雲寺―郷土資料館―市(八雲)神社、境内の自治会館で昼食 ―遷喬館―時の鐘―諏訪神社―岩槻
城跡(岩槻公園)―淨安寺(児玉南柯、高力清長の墓)―愛宕神社(大構)―岩槻駅(電車)―越谷駅
解散 (行程約六キロメートル)

案内者 理事 鈴木 秀俊

会費 金一、六〇〇円(交通費、資料代、謝礼など)

主催 越谷市郷土研究会

『新篇武蔵風土記稿』岩槻城並城下町の項に、

「岩槻城ノ西ニアリテ外郭ノ内ナリ、寅ノ方ハ本城ニソヒ、南ハ柏崎村、西ハ箕輪、加倉ノ二村、北ハ本宿及元荒川ヲ越エテ対岸ハ辻村ナリ。東西十一町、南北十五六町ニ余レリ。其間ニ市宿口・諏訪小路口・旦過口・林道口・田中口等、凡五ヶ所ノ門ヲ置キ、市宿町・久保宿町・洪江町・旦過町・横町・新町・富士宿町・林道町・大工町・田中町・元代官町元同心町・新曲輪町等ノ名アリ、其内、旦過町・大工町ハ久保宿町ニ属シ、元代官・元同心ノ二町ハ田中町ニ属シタレバ、城下九町ト号シ、総名ヲ岩槻宿ト唱ヘリ」

長祿年間、太田氏が岩槻城を築いたあと、各地から人々が移り住み、集落的なものから次第に成長し城付の町場が形成され、永祿三年（一五六〇）勝田佐渡守が城主太田氏房に願ひ市立をする。

その後、天正十八年（一五九〇）落城当時、町人達の半ばは戦乱を避けて他所に立ち退いたが、徳川氏入国後は高力タカチカが岩槻城主となり、住民に地子免許の地を与え、城下町の復興につとめたので、町人達が再び帰ってきて城下の体裁が整い、活気が蘇った。

さらに高力氏は慶長六年（一六〇一）市免許を与えたので、毎月一・六の日に定期市が開かれ、近郷近在の商業の中心となって繁栄した。

また当所は日光御成道宿駅の一つで、江戸より行程九里。將軍、諸大名の日光社参その他に人馬継立を行う。

明治二年（一八六九）岩槻藩管地（岩槻県） 同八年岩槻町を編成、以後埼玉県管轄となり、同二十二年太田町を合併する。

昭和二十九年五月、岩槻町と川通村、柏崎村、和土村、新和村、河合村、慈恩寺村が合併。

同年七月、市制を施行して岩槻市となった。

芳林寺

静岡県藤枝市の洞雲寺の末寺で、太平山と号し、本尊には釈迦如来を祀る曹洞宗寺院である。開山は文禄四年（一五九五）に没した覺翁文等であるといわれている。古くは、東松山にあり地藏寺と呼ばれていたものを、太田大和守資高が、母芳林妙春尼追善のため永禄十年（一五六七）現在地に移して堂塔を修造し、芳林寺と改めたと伝えられる。

天正十八年（一五九〇）岩槻城主高力清長が寺の荒廃を嘆き、大修理をしたが、間もなく火災にあったため、二代目城主忠房が再建したという。後に文化八年（一八一七）焼失したため、天保十二年（一八四一）に本堂と庫裡が再建された。

境内に市文化財の岩付城主太田氏資供養塔がある。

弥勒寺

新義真言宗で山号は光岩山釈迦院と称す、京都醍醐三宝院の末寺で本尊に不動明王を祀る。寺伝によれば、建久年間（一一九〇～一一九九）の開基で、寛元年間（一一四三～一一四六）僧秀典によって中興されたという。この寺には寛元四年の銘をもつ梵鐘がある。

淨国寺

市内加倉にある淨土宗の寺で、新篇武蔵風土記稿によれば、

『浄土宗関東十八檀林ノ一ナリ、京都知恩院末仏眼山英隆院ト号ス、寺領五十石八天正十九年ニ賜ヘリ、寺伝ニ云、当寺八圓蓮社総管清巖ノ草創ナリ、コノ僧元足立郡鴻巣宿勝願寺ニ住セシガ太田十郎氏房、俗縁ニヨリ深く掃依シ清巖退隱ノ為当所ニテ寺地ヲ与ヘシニヨリ、天正十五年移リテ起立セシト云、其ノ時ノ文書アリ。其ノ文ニ

為勝願寺隱居於当地一寺進之候一簾御建立尤不可有相違者也 如件

天正十五年丁亥八月十一日 氏房花押

勝願寺

是證トスヘシ…略』

広々として静かな寺域に木立に囲まれてたつ壮麗な唐破風門、本堂は昔の格式の高さを偲ばせる。本尊阿彌陀如来。仏眼舍利宝塔を安置する（市文化財）。寺宝として、氏房書状、家康書翰二通。また、淨園寺の覚書『日鑑』は貴重な史料として県の文化財に指定されている。

本堂裏の木立の中に、ここを菩提所と定めた初代阿部正次、三代定勝と定勝の死去に殉じた家臣小倉政光の墓がある。

洞雲寺

曹洞宗の寺院、山号は加倉山という。本尊は釈迦如来。

開基は太田美濃守資頼いわれ、開山は布州東播磨禪師という。

後年、火災の厄に遭うが、山門は焼失を免れ、四百年の風雪に耐えて現存している。（市文化財）

遷喬館

市の中心部にある旧岩槻藩校。はじめ岩槻藩大岡家の藩士児玉南柯が、寛政十一年（一七九九）に開設した私塾であったが、文政年間（一八一八―一八三〇）藩主大岡主膳正忠固の時、南柯が藩儒にあげられるとともに藩校に昇格された。

家臣の子弟は、六〜七歳で必ず入校し、一五〜二〇歳で卒業した。常時四〇人ほどの門弟がおり、教師は南柯と助教一人、謝礼は二〇〇〜二五〇文であったという。現在も当時のまま保存されており、県内に現存する唯一の藩校として、県の史跡に指定されている。なお児玉南柯の日記、関係書類など六〇点も県の文化財に指定されているが、現在埼玉県立文書館に委託されている。

建物は平屋建て、屋根カヤ葺き、建築面積一三二平方メートル。内部は応接室や書斎、講義室、書庫などに分かれ、玄関には館名の由来を書いた額が掲げられている。

時の鐘

岩槻駅の東約八〇メートル、御成道から少し入った街中にたつ木造の鐘楼に吊り下げられてある。鐘は高さ一・八二メートル、直径〇・七六メートル、重さ七五〇キログラム。

寛文十一年（一六七一）、藩主阿部正春が時刻を知らせるために造らせたが、火災にあってひびが入った為、享保五年（一七二〇）、時の藩主永井直信が改鑄させたもの。中に大判二十枚が鑄込まれているといい、俗語にも『岩槻に過ぎたるものが二つある 児玉南柯と時の鐘』などと唄われ、親しまれてきた。今も毎朝夕六時に撞かれ、澄んだ音色を響かせている。

岩槻駅の東約二キロメートル、元荒川沿い右岸にある。文武両道兼備の名將として知られる太田道灌資長（一四三二—一八六）が、長祿元年（一四五七）に工を起こし、寛正三年（一四六二）に完成させた城の跡。この地に城を築いたのは奥州街道の押さえと、古河公方足利成氏への布石、江戸、川越、岩槻の三点を結ぶ武蔵経営の一策であったと言ふ。

築城伝説に、道灌が巡見に来た時、二羽の鶴が飛んできて、くわえていた枝を沼の水面に落とし足溜りとして休んでいるのを見て、築城方法を考えついた。竹を切つて束ねて沼に埋め、これに土を盛つて築城したという。城が一名、白鶴城、竹束ね城、浮き城と呼ばれるのはこれによつてゐる。

初代城主は道灌の養子資家で二代資頼（資家の子）は大永五年（一五二五）家臣の洪江三郎が小田原の北条氏綱に内応したため、岩付城を追われ石戸城（北本市）に逃げ延びたが、享祿三年（一五三〇）洪江三郎を討ちやぶり城主に復帰した。資頼の後を長子の資時が継ぐが、資時は早逝し、四代城主となつた資時の弟の美濃守資正は、三樂斎と称し、智勇兼備の猛將として知られる。武蔵の諸城が次々と北条氏の勢力に塗り潰されていく中で、資正はひとり岩付城にあつて松山、川越城の回復をはかり、安房（千葉県）里見氏と手を結んで、激しく北条氏に抵抗した。

しかし永祿七年（一五六四）。資正が北条氏との戦いで下総国府台（千葉県市川市）へ出陣中、岩付城内に反乱が起こり、長男の氏資が北条氏康の婿養子となり、北条氏の傘下に入ったため、資正はやむなく常陸（茨城県）へ去り、佐竹氏の客將として常陸片野城に居城した。その三年後の永祿十年、氏資は上総（千葉県）三船山の里見氏との合戦で陣歿してしまふ。

氏資には小少將という娘しかいないため、北条氏政は次男氏房を小少將の婿として岩付城に入れ、太田氏の名跡を継がせた。

天正十三年（一五八五）七月、氏房の婚礼が盛大に行われ、氏政は夫人を伴い、大行列で岩付城に入ったのである。

天正十八年（一八九〇）、豊臣秀吉の大軍が小田原に迫ると、氏房は軍勢を率いて小田原に籠城する。北条氏の支城であった岩付城は、浅野長政を総大将とする本多忠勝、鳥居元忠ら、豊臣勢一万三千余の包囲攻撃を受けた。

氏房留守中の岩付城は伊達与兵衛尉、妹尾下総守らに率いられた城兵二千余が守っていたが、激戦の末、衆寡敵せずついに五月二十二日落城する。妹尾下総守をはじめ、城將の大半が城と運命をともにした。その年の八月一日、江戸に入府した徳川家康は、高力清長を二万石で岩付に封じた。以後の歴代城主は次ぎの通りである。

徳川氏時代岩付城主一覽

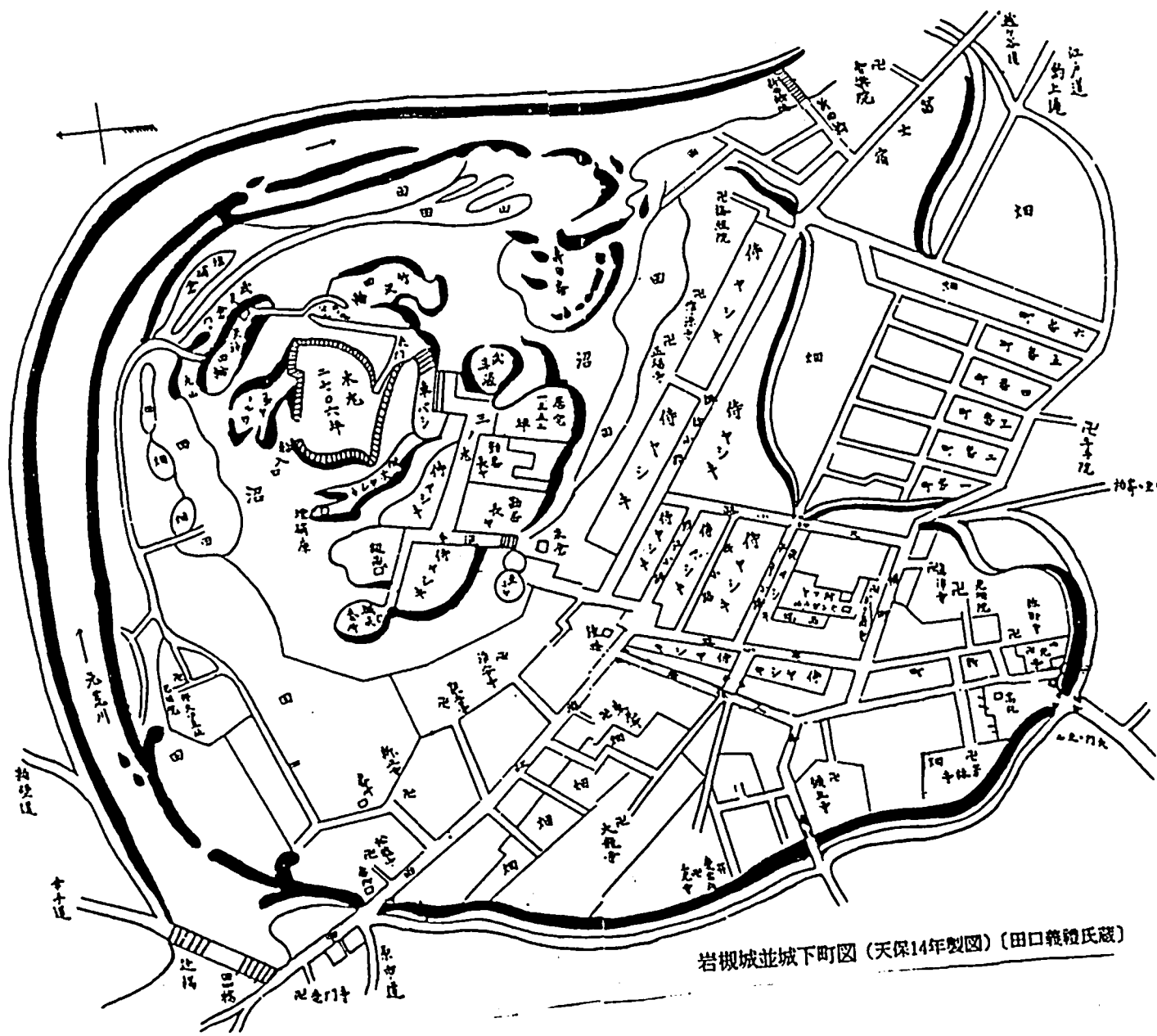
氏名	幕府の役職	補任	在任年月日	石
高力清長		河内守 左近大夫	天正18・8・9 / 慶長5・12・26卒 (慶長5・12) / 元和5・9	2万石
朽木内膳正 新庄駿河守			(元和5・9) / 元和6・10	
青山忠俊	老中	伯耆守		4万5千石
同部正次	老中 (父にかわり岩付城に住す)	備前守	(元和9・10) / 正保4・11・14卒 寛永3・4・6 / 寛永5・8・4卒 寛永5・8・14 / 慶安4・4・20卒 (慶安4・) / 万治2・1・23卒 万治2・4・18 / 寛文11・12・9 寛文11・12・19 / 天和元・2・25	8万6千石
同部重次	老中	対馬守		9万9千石
同部定高		備前守		9万8千石
同部正春		伊予守		11万4千石
同部正邦		備前守		9万8千石
板倉重種	老中	石見守		6万石

大田 忠光	大田 忠喜	大田 忠正	大田 忠政	大田 忠義	大田 忠光	永井 直隆	永井 尚平	永井 直政	小笠原 長照	小笠原 長政	松平 忠房	戸田 忠昌
		若年寄			御側御用人			若年寄		老中	御側御用人	老中
兵衛頭	兵衛頭	主膳正	主膳正	丹後守	(式部少輔) 出雲守 (兵衛頭)	伊賀守	伊賀守	伊豆守	老枝守	佐渡守	伊賀守	山城守
慶応2・3	嘉永5・8	文化13・10	寛永9・3	天明7・10	天明2・3	正徳4・10	正徳元・7	正徳元・2	宝永7・5	元禄10・4		
明治4・7	慶応2・3致仕	嘉永5・8	文化13・10	寛永9・3	天明7・10	正徳4・10	正徳元・7	正徳元・2	宝永7・5	元禄10・4		
14慶應		10・18卒	26致仕	23卒	24致仕	5・21	8・29卒	6・3卒	2・11	5・18		
2万3千石	2万3千石	2万3千石	2万石	2万石	2万石	3万2千石	3万2千石	3万3千石	6万石	6万石	4万8千石	5万1千石

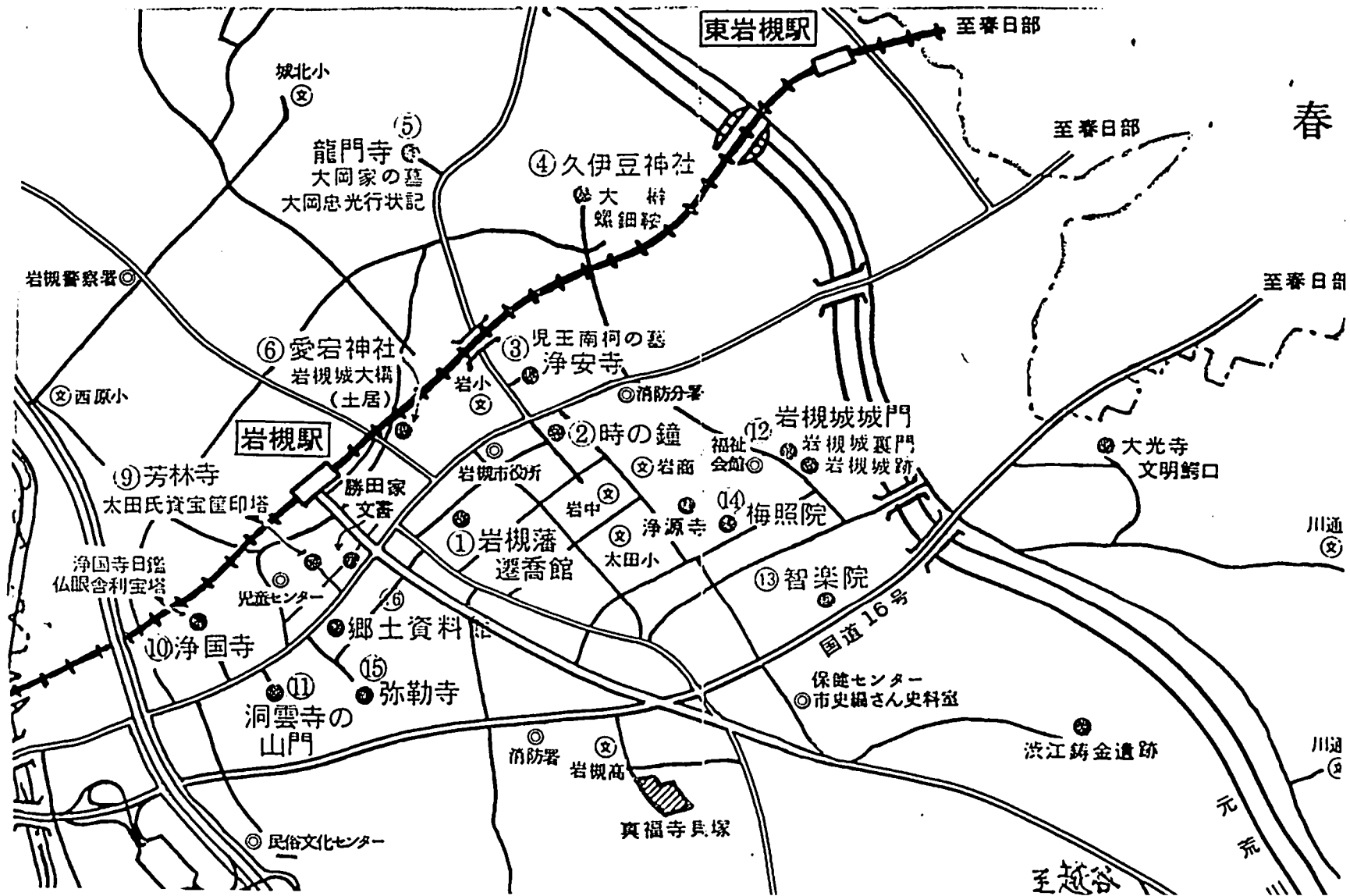
岩槻城は城内約三万二千余坪。川越城、忍城とともに、県下三名城の一つに数えられているが、明治四年廃城となり、今は本丸、二の丸、三の丸などは宅地となり、僅かに新曲輪が往時の面影を残し、岩槻公園として市民の憩いの場となっている。

※ 築城については、上杉持朝が家臣の太田道眞（道灌の父）に命じて築かせた説、太田道灌に行わせたという説、あるいは道眞、道灌父子に命じたという諸説がある。

※ 明治元年。越谷市域の岩槻藩大岡氏領は大松、恩間、恩間新田、西新井、谷中、大竹、大道、三の宮の八ヶ村である。



岩槻城並城下町図 (天保14年製図) (田口義禮氏蔵)



淨安寺

京都知音院の末寺で、快楽山微妙院といい、本尊に阿弥陀如来を祀る。寺伝によると、初めは真言宗といわれ、永正二年（一五〇五）増上寺第五世天誉了闇上人が開山となり淨土宗に改め、東国八八〇郷の觸頭を務めていた。『六ヶ村栄広山由緒著聞書』（越谷市大松清淨院文書）には、「武州崎西郡洪江寺八建曆元辛未（一一二一）野与党洪江・金重・柏崎・野島・白岡・箕勾の一門取造營也、武総両國淨家一統の惣本寺たり」とあり、洪江氏の氏寺説もある。天文年中（一五三三）の住僧である縁誉称念は、自行のために新たに三六珠の貫珠（念珠）を初めて作った。淨土宗では今でもこの珠数を用いている。

慶長五年（一六〇〇）徳川家康は、上杉景勝征伐のときに淨安寺を本陣として一宿した故により朱印地六二石余を賜った。境内墓地には、岩槻城主高力清長の墓石や徳川家康の孫徳松殿（越後少將）とその母お竹殿（側室）の供養塔・墓石、岩槻藩儒児玉南柯の墓所などがある。

愛宕神社（岩槻城大構）

この社は迦具土命（火防の神）を祭神として土塁の上に鎮座している。この土塁を大構（土居）という。この大構が文献に見い出せるのは太田氏房印判状である。天正十六年（一五五六）ごろと考えられ、これには大構とある。

大構は、岩槻城の外郭に当たり、内から外にかけて土塁・堀・道路の順で築かれていた。高さは約三間（六メートル）といわれ、大構の周囲を回れば、二里（約八キロ）もあり、約三キロは樹木が覆い茂って、昼でも暗かったという。この大構は、城と町を一つの土塁で囲み、商工業者を大構内に住まわせ保護し、外敵や不法の輩の侵入を防ぎ、武器、食糧などの城内確保の上で大切な働きをした。

榮廣山由緒著聞書（越谷市大松清淨院文書）に見る涇江寺

文龜四甲子（一五〇四）年。向畑城主新方頼希が八条兵衛尉と戦い敗死すると、頼希の弟清淨院の現住、高賢上人は八条に新方の地を追われ、岩槻涇江寺に落ちのびるが、

「一山の衆徒を切り殺し、又は追い出し佛閣僧坊残らず焼き払い、上人を討取らんと、山のくまぐま探し求めしかども、折り節上人、平方白竜山（林西寺）へ行きし跡なれば、虎口を遁れたまふ。八条聞きて白竜山に押し掛けしかども見えざれば、是までなりと引き揚げたり。上人は八条が乱妨を聞きて東に向かいて走りたまふ。土人、上人に奉りて、東の方へ退去覺束なし、是より西に向かいて落ち行きたまへと、御案内申しければ、上人大いに悦び農夫が案内に任せ、西を差して落ちたまふ。農夫かいがいしく供奉して春日部、市の割の境に至り、漁人を頼み舟にて大場沼を越え、中曾根村まで送り、是より涇江に程あるましと、別れてこそは帰りける。夫より、上人衆徒両三人を俱して、角田（古隅田川）、荒川（元荒川）押し渡り、武州の地に入りたまふ。

涇江の欣誉上人を頼みありて年月を送りたまへしが、「我が身積門の徒たりといへども、弓箭の家に生まれながら、家の滅亡を見るに忍びず」と、時々新方旧恩の人々に会いて、その想量を語り、一山退去の衆徒を語らい、密かに涇江山内（淨安寺寮なるべし）に評席を開き……」

とあり、涇江寺を新方氏再興の基地とする。

その後、永正十七庚辰年十月、高賢上人兵を率い向畑の陣に押し寄せ、八条方の守將別府三郎右衛門を討ち取り、向畑城を奪回する。

永正十八辛巳年（一五二二）正月七日、八条方の大軍と涇江の加勢をうけた新方勢は、再び小林の野で激突し、決戦の末、新方側が勝利を収め本領を安堵したという。

児玉南柯

延享三年（一七四六）豊島氏の子として甲府に生まれた。十一才のとき岩槻藩士児玉親繁の養子となり、十六才で御中小姓として藩主大岡氏出仕した。

十八才で江戸勤番となり、神田一ツ橋の藩邸に住み、二十五才のとき藩主忠喜の推薦で湯島昌平塾に入学し、一層漢学を深めた。三十才で忠喜の長子忠要の素読相手を努め、三十三才で郡奉行となり、以後御側用人、御勝手向取締方を歴任した。

安永九年（一七八〇）房州千倉の奉行として赴任していたとき、その漢学の素養で清の漂流船を訊問し、無事帰国させた。その後前任者の不正が発覚して職を辞し、私塾遷喬館を創建し、著述と教学を後半生の業とした。

文政十三年（一八三〇）一月四日、八十五才で自邸にて永眠した。墓所は浄安寺である。
南柯の安永九年（一七八〇）から文政八年に至る四十五年間の五十五冊の日記は当時の漢学や、南柯の身辺のことを研究するために貴重な資料。他に著書「徳政篇」をはじめ五十余冊が、現在県立文書館に保存されている。

参考文献 新篇武蔵風土記稿

歴史図書社

岩槻市史

岩槻市史編纂室

岩槻・城と町まちな歴史

聚海書林

ふるさとの散歩道

県政資料室

岩槻市の文化財ガイドコース

岩槻市教育委員会

埼玉郷土辞典

埼玉新聞社

栄廣山由緒著聞書

清淨院